

癒やされぬ輪禍

事故撲滅への道

①

人口10万人あたりの交通事故発生件数が、7年連続で全国最多の香川県。2009年で1169件と、全国平均の2倍以上にのぼる。その県内でも、年に50件超と最も多発している場所が、高松市内の国道11号。上天神交差点と、西に約800メートル離れた交差点まで

の区間だ。

車線変更抑える

上天神交差点は、JR高松駅や高松空港、徳島方面などの結節点。片側3車線の国道の中央寄り1車線は、交差する幹線道路をくぐるアンダーパスになっており、絶え間なく車が通る。討中の第2弾が、頭上の標

事故の誘因となる車線変更を視覚的な効果で控えさせることができる。実際、08年8月に導入した平均55件の事故があったのが、導入後1年間は42件に減った。

さらに減らそうと現在検討中の第2弾が、頭上の標

その交差点付近の車線境界線の両側を挟むように、白い平行四辺形の「矢羽根」

と呼ばれる模様が見える。

この矢羽根が、ワーストワ

ン返上を掲げ、県警と四国

地方整備局が、香川大の土

井健司教授(安全システム

建設工学)と取り組む道路

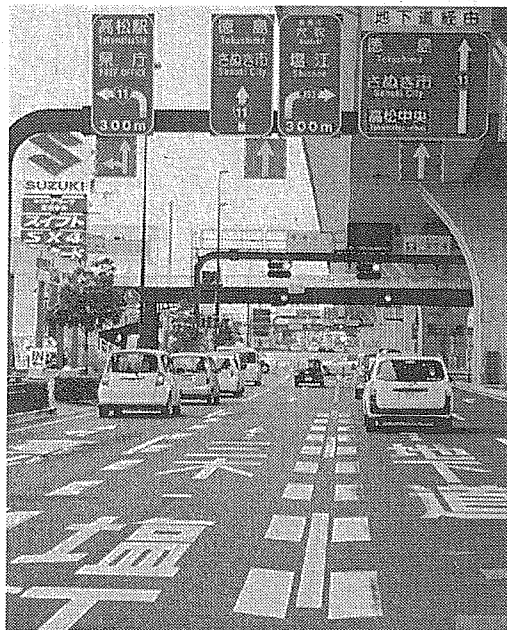
改良作戦の第1弾だ。

改良作戦の第1弾だ。

改良作戦の第1弾だ。

道路標示 工夫で効果

車線境界線両側に「矢羽根」と呼ぶ模様。路面の案内標示も変える方針だ(高松市の国道11号)



視覚に訴え、安全に走らす

識や各車線の路面にある行き先案内の標示の改善だ。通勤でよく通る男性会社員(35)は「不慣れな人には、どの車線を走ればいいのか分かりにくく、無理な車線変更も多い」と話す。

形でも信号認識

「周りの人が動き出したので渡ろうとしたら、まだ赤信号で怖い思いをした。」

土井教授らの事故の分析

土井教授らの事故の分析

土井教授らの事故の分析

土井教授らの事故の分析

土井教授らの事故の分析

での実験で、運転者が路面の標示の方を見る傾向があることも判明。そこで路面標示の改善を計画。現在、地下道とだけ表示しているアンダーパスにつながる車線に「徳島」と具体的な行き先を加えるほか、県外ドライブには分かりにくい地名「三木」の標示を「徳島」に変更する方針だ。土井教授は「快適な道路環境のデザインは事故抑止にも結びつく。ちょっとし

大阪府警が昨年6月、同

市鶴見区の交差点の信号機

脇に試験的に設置した補助

装置。太陽光など反射の影

響を受けにくい発光ダイオ

ード(LED)を使い、赤

信号を四角、青信号を円形

にし、色と形で認識できる。

装置を開発した篠原電機

(同市北区)の担当者「各

地で試した視覚障害者には

好評。装置の高さも1メートル未満と低く、高齢者や子ども

にも見やすい」と話す。

より安全で利用しやすい

道路環境をどう構築してい

くか。官民の知恵が問われ

ている。